探求の心を宿すスピリチュアルな考古学者

Ronald Holt

ロン・ホルト

考古学者としての立場から神聖幾何学の本質に魅了され、現在ではフラワー・オブ・ライフの代表を務める
ロン・ホルトさんが2007年1月に来日しました。
多次元的な視点を駆使する達人である彼に、「完全な人間であること」の意味を、お聞きしてみましょう。

通訳＝甲斐さやか Interpretation by Sayaka Kai　写真＝伊藤 淳 Photographs by Atsushi Ito

Ronald Holt

PROFILE

米国アリゾナ州フェニックスに在住。
世界中のFOLのファシリテーターを統括するFlower of Life Research代表。
その一方で考古学者として、海洋や陸地を含むポリネシアの考古学を専門に研究活動を続けている。

スピリチュアルな目覚めを喚起した真珠色に輝くオーブ

ロンさんは、ドランヴァロ・メルキゼデク氏が提唱した神聖幾何学に出会う以前、南太平洋のサイパンやロタ、そしてハワイの全ての島々を活動フィールドとする考古学者として活躍していました。その後、神聖幾何学(=フラワー・オブ・ライフ)に出会い、97年からはメルキゼデク氏から「Flower of Life Research」の運営を、妻であり著名なチャネラーでもあるリサ・ロイヤルさんと共に任されています。

今回は、フラワー・オブ・ライフの次段階のワークであるオクタヒドロン・ワークショップを行うために来日しました。

「最後に東京でワークを開いたのが1995年でしたから、今回、ずいぶんと久しぶりのワークを行っているということになります。日本を訪れたのは、パートナーであるリサが日本でワークを行っていたり、神聖幾何学のファシリテーターたちもワークショップを行っているということ。そして、ドランヴァロ自身も日本でワークを行っていることで、フラワー・オブ・ライフの上の段階であるワークショップへの関心が高まってきていることが理由です」

神聖幾何学のエキスパートとして後進の指導にあたるロンさんの、考古学者にしてスピリチュアルな世界のリーダーであるという独自のスタンスのルーツはその子ども時代にありました。

「考古学者の道を選んだわたしですが、実は12歳くらいからスピリチュアルな世界に入っていました。そのころ、父が空軍の仕事のためギリシャで仕事をしていたのですが、その父が亡くなってしまい、わたしたち家族はアメリカに帰ってきました。そして、ちょうど父が死んで1年後の真夜中、突然目が覚めて周囲を見回すと、寝ているわたしのひざの辺りに真っ白いオーブ(光の玉)が浮かんでいたのです。それは真珠のように輝く、パールホワイトのオーブでしたが、なぜか〝乾いて〟いるように感じられました。その周辺は明るく照らされていましたが、とても柔らかい光でした。しかし、わたしはそれを見ていてだんだんと怖くなってきたので、隣に寝ていた兄を起こそうと思いました。とにかくこのオーブを見てもらおうと思ったのです。しかし、兄を揺り起こそうとしたその瞬間に、『兄を起こすとこのオーブは消えてしまう。そして僕は兄に怒られてしまうだろう』と直感し、もう一度向き直ってオーブを見つめました。そして、自分でもどうしてなのかよく分からないのですが、不思議なことを言ったんです。それは『まだ準備ができていない。今は怖いだけだ』という言葉でした。わたしのベッドはちょうど壁に接するように置いてあったのですが、私がそう言ったとたん、そのオーブはスーッと壁の中へ、まるでそこには何もないかのように入っていったのです。気がつくとオーブが入っていったあたりの壁は、なぜか何も無くなってしまっていて、星空が見えていました。そしてこのオーブはだんだん遠ざかって小さくなってしまったのですが、その途中で止まって、まるでサヨナラを言うかのようにしばらくその辺りに止まり、それからまた遠ざかり始めました。最終的に消えてしまうまで、何度かそのような動きをしたのです。わたしはそのことにとても驚いたことを記憶しています。そのときにどうして『まだ準備ができていない。今は怖いだけだ』という言葉が出てきたのかは、まったく分かりませんでした」

知識とスピリチュアルの融合をもたらす神聖幾何学との出会い

「1993年くらいにユナイテッドエアラインの添乗乗務員である女性の友人ができました。あるとき、彼女が『きっと気に入るわよ』と言って、わたしにビデオを貸してくれたのです。それは神聖幾何学のビデオでしたが、何も知らないわたしは『神聖幾何学って何?』と聞き返しました。すると彼女は、『見れば分かるわよ。だけど注意して、夜は見ない方がいいわ』と忠告してくれました。ところが、わたしはついうっかりと夜に見始めてしまったんです。そのビデオはドランヴァロのプレゼンテーションによる、フラワー・オブ・ライフのワークショップが記録されているものでしたが、いったん見始めたら止まらなくなってしまい、結局3日3晩見続けてしまいました。36時間のビデオだったのです。それが神聖幾何学との最初の出会いでした」

ロンさんが神聖幾何学のビデオに〝ハマって〟しまったのは、スピリチュアルな世界に興味があったのはもちろん、考古学者としての知見とリンクするところが大きかったこともあるのでしょう。

「それからフラワー・オブ・ライフに興味を持つようになりました。古代の遺跡というものは、いわゆる自然のパワースポット、レイラインに沿うように作られているものなのです。考古学者としてのわたしの仕事のひとつは、森の中に入って古代の遺跡を発見することですが、現在、わたしはパワースポットのエネルギーをとても敏感に感じることができるので、そういう意味で仕事がとても楽になりました。神聖幾何学を勉強していくと分かるようになってきますが、神聖幾何学の文様の背後に存在するエネルギーは、世界中のいわゆるレイラインやパワースポットに存在するものとまったく同じものなのです。古代の人々は、この生きているエネルギーにさまざまな名前を付けました。そして古代のさまざまな儀式の中には、共通して同じようにエネルギーをとらえる方法がありました。これまで単に考古学という学問の枠に収まっていたさまざまな事実・事象をスピリチュアルな点からとらえ直し、再構築するということはわたしにとってとても興味深いものです。ですから、現在の私の立場を明確にするならば、『スピリチュアルな考古学者へと進化した存在』だといえます」

フラワー・オブ・ライフのエネルギーを感じられる場所

フラワー・オブ・ライフへの理解が深まるとともに、そのエネルギーをぜひとも感じてみたいと思われる方も多いはず。その根元的なエネルギーを感じられる場所を教えていただきました。

「フラワー・オブ・ライフと同じエネルギーを感じることができるという意味で興味深い遺跡はこの地球上にたくさんあるのですが、実はわたしは東京にいるだけでもとても癒されます。わたしが日本にいる間、何度も足を運んだのが新宿御苑、浅草寺、明治神宮です。この3ヵ所を経由して、さらに南北に大きく延びるレイラインがあるように感じており、次の機会にでも検証してみたいと思っています。ところで、レイラインやパワースポットに共通するエネルギーには、2つの種類があるように感じます。陰陽という考え方がありますが、パワースポットやレイラインの場合でも同じようなエネルギーのとらえ方が可能です。例えばハートが開いていくような、天を抱きしめたくなるようなエネルギーがあります。それは男性的なエネルギー、陽のエネル

ギーです。反対に女性的なエネルギーもあります。これは天ではなく誰かであったり、自然の樹木や大地などの身近なものを抱きしめたくなるエネルギー、陰のエネルギーです。活動的なエネルギーと受容的なエネルギーという言い方でもいいでしょう。日本国外のパワースポットとしては、セドナ(米国アリゾナ州)、モニュメントバレー(米国ユタ州・アリゾナ州)などが非常にパワフルです。アメリカ南西部のニューメキシコ州、イギリスのグラストンベリーやエイプベリーもパワフルですね。グラストンベリーでは聖ミカエルと聖マリアのレイラインがちょうど交差しているのでとてもパワフルなのです。エイプベリーもユニークな特徴がたくさんあります。言い方がおかしく聞こえるかもしれませんが、とても『美味しいエネルギー』なのです」

シード・オブ・ライフのワークが必要とされる理由

フラワー・オブ・ライフでは、ファシリテーターがそれぞれオリジナルのワークを提供していますが、ロンさんはこのワークをもっと先に進めたいと思ったそうです。それには理由がありました。1999年に創始者であるドランヴァロ氏に「このワークショップにはいくつかの問題点がある。それを解決してほしい」と言われたのです。

その問題点とは例えばこういうものです。

フラワー・オブ・ライフのワークの中心にマカバ瞑想というものがありますが、ワークショップ参加者の6割前後が、マカバというエネルギーの場を作るにあたって大きな問題に直面していました。エネルギーの円盤であるマカバは本来腰のあたりに位置すべきものなのに、約6割の参加者はその中心が胸の辺りまで上がってしまっていたのです。そして、それによって、感情的に、あるいは肉体的に『流血』と呼ばれうる事態に陥ってしまうと、時間とともに感受体、そして精神体に問題が起きてくるそうです。さらには、ハイアーセルフとつながることができなくなるという問題も起きつつありました。こういった問題を修正するのが、シード・オブ・ライフのワークショップだと、ロンさんは言います。

この最新の神聖幾何学ワークを知っていただくために、ワークショップの内容を日を追って紹介していただきましょう。

【1日目】

「最初の日は、完全なる統合をするために統一性とコミットメント、責任感がいかに重要であるかを教えていきます。この3つは全ての気付きを高めるために非常に重要です。自分の習慣の形、選択のパターンに常に気付いていくということです。こういったスピリチュアルなメソッドをしっかりと行っていくと、至福という素晴らしい状態が訪れます。しかし、多くの人々にとって至福というのは逃げ道にもなってしまいます。コミットメント(現実にかかわること)、責任、自分自身の統一性といったものまで捨ててしまって、この至福の中に安住してはいけません。至福の状態に達したなら、再び気付きの状態にもどり、コミットメントと責任を取り戻して自分自身の中で統合することで、私たちは完全な人間になれるのです。至福のままでは自分の問題点を脇に追いやり、見ないようにしてしまうということが起きます」

【2日目】

「この日は黄金らせんのエネルギーを使ってワークを行います。黄金らせんというのは、全ての神聖幾何学の型における根元的エネルギーであり、生命・創造のエネルギーそのものです。また、意識や愛のエネルギーでもあります。これら3つのエネルギーが一つになって黄金らせんのエネルギーが生まれます。このエネルギーが織りなす情報の周囲にDNAがあることから、この黄金らせんを『種子の中の種子』と呼んでもいいでしょう。ワークでは、このエネルギーの根元へ向かい、全てを明け渡すポイントまで戻っていきます。わたしたちはスピリチュアルな道を探求するときに、ただ一つのものを探そうとしますが、そこで探し求めているものは意識であり、気付きそのものです。それは水晶のようにとてもクリアなもの。わたしたちは自分自身だと思っているエゴを手放すことで純粋な意識へとなるのです。進化しようと思う気持ちですらエゴであり、それすらも手放さなければなりません。わたしたちはすでに完全な存在であるということを知るために、黄金らせんをたどり、地球にある最も古い神殿にまで戻ります。それはフラワー・オブ・ライフが始めて地球に現れた時代であり、さらにはビッグバンの起こりまでさかのぼっていきます。そして、全ては無に帰り、無こそが全てであるということに気付くのです」

パワフルに心身を癒す神聖幾何学のヒーリング

この神聖幾何学の深遠な世界は、現実世界におけるツールとしても役立てることができます。

【3日目】

「この日はコンパスを使ってフラワー・オブ・ライフの絵を描いていきます。描く人によって絵の形は違うものになりますが、個々のフラワー・オブ・ライフを見ることで、その人の肉体と精神になにが起きているのかが分かります。臓器、チャクラ、意識の状態が分かるのです。そして、エネルギーセンターであるハラ(丹田)を活性化するための8種類の呼吸法を行います。フラワー・オブ・ライフの元々の教えにはハラにかんする記述はありませんが、極めて重要です。西洋では松果体やハートが活性化している人は多いのですが、ハラにエネルギーを貯める方法がないため安定度に欠けます。松果体やハートを使用するとすぐにエネルギーが枯渇してしまうのです」

【4日目】

「この日は、自分のマカバの一部を使って、相手を癒すワークを行います。まず前日と同じワークを行い、臓器、チャクラ、意識の状態を診断してから、参加者は4人のグループに分かれます。中央に1人、その周囲を3人が囲んでエネルギーのらせんを活性化させます。3人の人は中央の人のエネルギーを見てその状態をチェックして、心身の状態を全て書き記した後にヒーリングを行い、最後に何が起きていたのかシェアリングを行ないます。このワークは極めてパワフルなものです」

シード・オブ・ライフのワークショップはこの後も7日目まで続き、神聖幾何学のさらなる神秘が次々と開示されていきます。ただし言葉だけではとても伝えきれない世界に突入していくので、ここでの紹介はこのあたりにしておきましょう。

フラワー・オブ・ライフの進化型であるこのワークは、考古学者として古代文明に精通すると同時に、古今東西のスピリチュアルな叡知を絶妙にバランスさせる、ロンさんの卓越した才能のたまものといえるでしょう。そのすべてを統合しているのは、お会いになった方なら誰でも感じる、その包み込むような大きな愛のオーラであるのかもしれません。